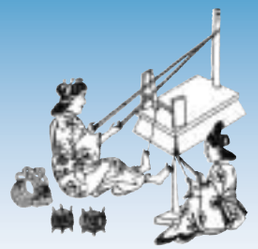
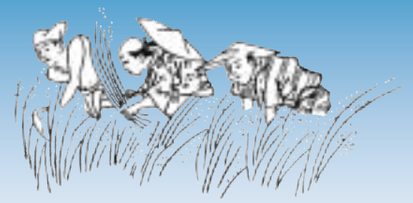


連載 江戸のくらしと金銭観



二世紀半にもわたる「天下泰平」を民衆が謳歌した江戸時代は、くらしや文化、経済が目覚ましく発展した時代でもありました。このコーナーでは、現在に通じる「市場経済」が確立したこの頃の人々のくらしと金銭観を、4回にわたり紹介します。

第1回

江戸時代の通貨と物価の変動

江戸東京博物館館長
竹内 誠

三つの異なる貨幣を上手に使い分けた江戸の人々

ちょっと想像してみてください。私たちのお財布の中に「円」「ドル」「ユーロ」がすべて入っているとしたら……。モノを買うときに主に使うのは「円」、そのためには手持ちの「ドル」や「ユーロ」を「円」に両替しなければならず、しかもその相場が毎日変動するとしたら……。

実は江戸時代はまさにそのような状況でした。金貨、銀貨、銭（銅）貨の三種の通貨が全国に流通し、庶民も、日常的に両替をしながら暮らしていたのです。

金貨は一両（小判一枚）＝一分金四枚＝一朱金十六枚の四進法。銀貨は枚数ではなく重さの匁（もんめ）で表し、不定形な丁銀・豆板銀がありました。江戸初期の金銀銭の公定交換比率は、金一両＝銀五十匁＝銭（銅貨）四貫文（四千枚）でした。

しかし五代将軍綱吉の元禄の頃から、幕府が貨幣の質を落としたこともあって銀貨の価値が下落。元禄十三年（一七〇〇年）以降の公定交換比率は、金一両＝銀六十匁に、文化文政の頃には銭の価格が下落し、金一両＝銭六貫文ぐらい、さらにはおよそ七貫文へと変化しました。この相場は地域や日によって異なっていたので、より有利な条件で両替するための情報収集が不可欠でした。今考えるとなんとも面倒なシステムですが、江戸時代の庶民は、それを当たり前のこととしてこなしていたのです。

宋や明からの輸入銭から自前の「寛永通寶（かんえいつうほう）」へ

中世以降、貨幣は徐々に人々の間に浸透して売買に使われるようになっていましたが、日常生活に使う銭は、宋や明から輸入されたものでした。国内で流通したのは、中国から運ばれてきた宋銭や明銭だったのです。

三代将軍家光の時代、寛永十三年（一六三六年）になって、いよいよ「寛永通寶」の鋳造が始まります。流通の主役となる銭を、自前で発行するようになったのです。これこそ、真の意味での貨幣経済の始まりを意味します。東アジア流通圏からの自立という、経済の一大転機でもありました。

「寛永通寶」は幕末までその名称を受け継ぎます。寛永から二百年以上もあとの安政年間に鋳造されたものも、慶応年間に鋳造されたものもすべて、その表面の文字は「寛永通寶」です。

江戸は「現金」関西は「現銀・」

よく知られているように、関東では主に金、関西では銀が流通の主役でした。これは佐渡や伊豆、甲州などの金山が関東に多く、生野、石見など銀山は関西に多かったことが主な理由です。

今に残る「現金」という言葉も、関西では「現銀」と変化しました。大ヒットした越後屋のキャッチフレーズ「現金掛け値なし」は、関西では「現銀・掛け値なし」になるというわけです。

ちなみにその頃は、「節季払い（年二回）」「晦日払い（月一回）」のようにツケで買って、後からまとめて払うのが主流。支払うときの「掛け値」には、本来の商品の値段に利息のような割り増し料金が加算されました。そこで買うときには「ちょっと負けてえな」という値引き交渉があたりまえになり、大坂の人々はそれを楽しんでさえいました。

しかし江戸は武士が多かったためか、値引きの交渉などという〝潔くない〟行為はなかなか気風に合わず、商人の言いなりでした。現金でその場で支払う代わりに、正札どおり、それ以上の掛け値はないという越後屋の商売のやり方が大歓迎されたのは、そんな江戸市民の心理にぴったりとはまったからのようです。

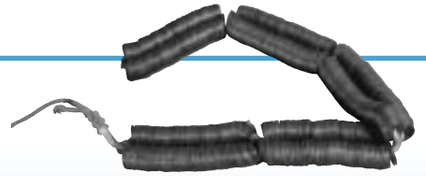
米価の下落に苦慮し続けた江戸幕府

幕府や藩は、年貢を主に米で徴収します。財政の基本は米。地方の藩も江戸か

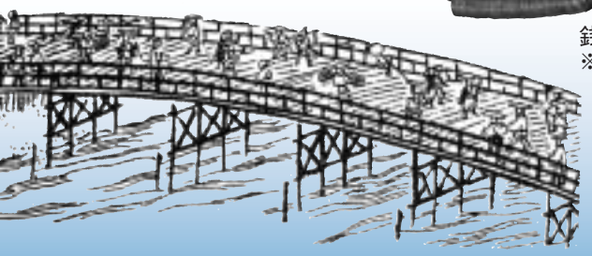
文政一朱金

慶長一分金

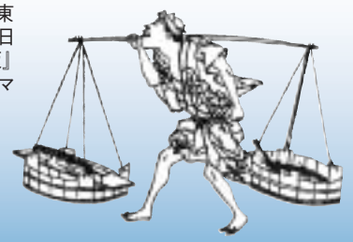
慶長小判



銭さし（一貫文）
※銅貨千枚



●竹内 誠（たけうち まこと）
昭和8年（1933）東京生まれ。東京教育大学大学院博士課程修了。文学博士。専攻は江戸文化史・近世都市史。信州大学教授、徳川林政史研究所主任研究員、東京学芸大学教授などを経て、現在東京学芸大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長、徳川林政史研究所所長、日本博物館協会会長なども務めている。著書は『江戸と大坂』『徳川幕府と巨大都市江戸』など多数。NHK大河ドラマなどの時代考証も担当している。



連載 江戸のくらしと金銭観

寛永通寶（銅一文銭）

大坂のどちらかに年貢米を運び、そこで換金します。そうしないと藩の財政が成り立たないのです。そこで問題になってくるのが米の値段です。

単純に考えれば、財政が苦しくなったら、年貢米を今までよりもたくさん徴収できれば、手持ちの米は増えて、財政も潤うはず。ところがそう簡単にはいきません。米の量が増えれば価格が下がり、たくさん売っても入ってくるお金は逆に減ってしまう。

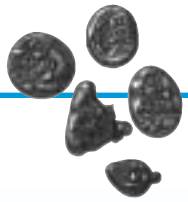
米を換金しなければ生活に必要な物資を買うことも、人を雇うこともできないのに、米以外の物資の値段は高くなるばかり。結果的に財政難は解消されないのです。

そこで幕府は、財政の根本となる米価を一定の基準（金一両＝米一石）で維持しようと、あの手この手の対策を打ち続けます。例を挙げましょう。市場に出回る米の量が少なくなれば、米の価格は上がります。まず米を大量に使用する酒造業者に、普段よりもたくさん酒を造るよう、強制的に命じました。市場に出る米を減らすもう一つの方法は買占め。しかし幕府自身には買占めを行うだけの資金がありませんから、代わりに米を大量に扱う米穀業者や、お金に余裕のある豪商に米を買い占めさせて米の値段を吊り上げる。これが買米令です。

しかしやがてこうした方策も行き詰まります。そうするとまた新たな工夫を重ねる。江戸時代の二世紀半、特に後半は、幕府は飢饉の時期を除いて、米の値段を"適正な価格まで上げる"ことに追われていた感があります。

江戸時代は「米遣（つか）い経済」であるとよく言われますが、時代と共にその内容は少しずつ変化しました。九代将軍家重の頃からは、米だけに頼る経済からの脱却も試みられます。老中田沼意次（おきつぐ）は、商人に特権を与えてその代わりに冥加金（みょうがきん）を徴収。重農主義から重商主義をも加味した方向へと政策転換しました。

田沼失脚の後に寛政の改革を行った松平定信は、入ってきたお金をただそのまま使ってしまうのではなく、一部を運用する公金貸付政策を導入します。財政金融政策、これはまさに、金融の論理の実践。このように江戸時代は、現在に通じる経済システムが確立した時期でもあったのです。（談）



慶長豆板銀

慶長丁銀

※掲載写真（貨幣）は日本銀行貨幣博物館提供